小説

奨励賞

【共通テーマ作品】

タブノキの微笑み――芦城公園の風景から――

高畑康三

入口では、樹齢三百五十年の大きなコブを持つタブノキが出迎えてくれる。

丸いコブを付けた木はまるで仙人のようにも見え、その優しいまなざしで来園者を見つめている。

「公園のタブノキから微笑みの魔法を掛けられないようにね」

私の顔を見るたびに、言っていた親友の川村は三ヶ月前に亡くなった。

手取川の近くの同じ村で育ち、幼稚園、小学校、中学校も同じで、この公園の通り抜けた所にある高校も同じだった。ともに自転車で寺井駅まで出て、そこから電車で小松駅まで行き、高校に通った。

高校の三年間、通学途中に、多くのことを二人で話し、その中でタブノキの魔法についても彼から何度か聞き、そのたび冗談と思い、気にもとめなかった。川村が亡くなり、その意味の真意を聞くことも出来ないが、こうしてあらためてタブノキを見上げると、彼の言葉がまた思い出され「人間社会も同じで、何かの魔法を掛けられないように」という忠告のような言葉も、なぜかこころによみがえって来る。彼の言葉に引きずられるように、公園の中に足を踏み入れていた。

右手に市立博物館、左手に旧小松市公会堂が見え、老朽化で傷みがひどい両方の建物は令和六年一月一日の能登半島地震でさらに深い損傷を受けたのだろうか。倒壊を恐れ、建物に近づくことを拒むように黄色いロープが張られている。

昭和三十四年五月に開館した旧小松市公会堂と昭和三十三年に

開館し、昭和四十五年には正倉院を模した小豆色の校倉造の建物として開館した博物館が、やがて両方とも取り壊されていくのだろうか。

壊されていくことになる建物。見上げると、その窓ガラスには、いつもと変わらない青い空、白い雲が映り、いつもと同じように窓ガラスに白い雲が流れて行く。このまま何も変わらない光景を見つめていると、私もどこか不思議な世界へと誘われるような気がした。

そんな思いを振り切るように、建物を通り過ぎて、公園内に入ると、目の前の桜の並木の緑が眩しく見える。

木々と空の美しさを、追い続ける私のこころが、戻れなくなるほど、どこか遠くに飛んで行きそうな感じがした。

こころを抑え、じっと見つめていると、公園の緑の背後には大きく空に伸びた松の木が、背後に青い空とともにさらに美しく見えた。爽やかな風を感じながら、心の支えだった彼の死のショックもあったのか、また長年の仕事の無理が重なったのか。私は心臓疾患で二週間も入院した。病院から退院し、公園の土を再び踏み、あらためて生きて帰れたという実感を、青い空を見ながらしみじみと感じた。

（一）「白いカラスの風景」

新木榮吉（日本銀行総裁・戦後初代駐米大使）氏の銅像を通り過ぎ、築山に上る階段の前には桜の開花を告げる標準木があり、その前を通り過ぎて、横に伸びる老木の藤棚の前を過ぎると、なぜか隣の小学校との間に石垣が積まれている。なぜなのかと不思議に思い足を止めるが、すぐに歩き始めた。一刻も早く前田利常公の銅像裏にいるはずの「白いカラス」に会いたかったからである。

私が五ヶ月前に仲間からいじめられていた頭の部分が少し白いカラスを目撃し、「白いカラス」と名付けた。あの白いカラスが今でもいじめに負けずに、無事であることを確認したかった。

銅像裏の周辺を探すが、白いカラスの姿は見えなかった。その時、バタバタと異様な音がした。

みるみるうちに青い空がカラスの群れで、真暗になり、その内の六羽くらいが大きな羽音を立てて、大胆にも私の近くにスーッと舞い下りた。

さらに何羽かのカラスが、降り立ったカラスを援護するように松の枝から枝へと渡り、私を威嚇するようにカー、カーと鳴く。

いつものようなカラス同士の争い、今日はたまたま仲間の内での大きな争いなのかと思いながら、騒ぎが収まることを待ち、前田公の銅像裏で白いカラスを待ち続けた。

ここに来るまで、私は心臓疾患で入院していたので、直ぐにでも白いカラスの安否を確認したかった。

思えば、二週間前、心臓が苦しくなり、駆け込んだ病院で倒れて、私が目覚めたのはベッドの上だった。

ビービーという心電図の音で目を覚まし、周囲に目を凝らすと、暗闇に心電図の数字が見える。８０、７０、６０と段々と下がる。このまま下がり続けて静かに自分が死んでいくのかと思った。その後、心電図の数字は私の心を弄ぶように、上がり、下がりを繰り返した。はじめて経験する死の恐怖におびえながら、遠い朝を待った。その後に受けた手術は、右腕から管を通し、心臓の冠動脈の細くなったところを拡げる手術だった。

早朝、薄い光に包まれてベッドに眠る私を病室の上から見守るものに気づいたが、それが何者かが分からなかったが、起き上がると、白いカラスの羽が病室に何枚か落ちていた。

一時は死まで覚悟したが、手術を受けて助かった。あの白いカ

ラスが助けてくれたような気がした。礼を言いたかった。退院後は直ぐに白いカラスが生きているか確認したかった。

今、私は白いカラスとの出会いを待っているが、黒いカラスの騒ぎが一向に収まらない。

私は木製の堅い細長いベンチに座りながら、そばの小石を手元に置いた。

私は百六十三センチの細身で小柄だし、雰囲気だけではカラスを威圧できない。カラス退治に石を投げる準備をした。

ベンチに座り、石をしっかりと右手に握りしめた。

――さあかかって来いカラスども、いつでも相手になる――。

カラスは知能が高く、賢く、用心深い、と書物で読んだことがある。

たまらずに石を投げた。カー、カーと鳴きカラスがすぐに飛び立ったが、それでもすぐに危険が及ばないことを察知して、確認したのか、何羽かの真黒なカラスがすぐに舞い戻り、カー、カーと異常な高い声で鳴きながら、ゆっくりと周りのカラスと歩調を合わせるように、じりじりと包囲を狭め、いつでも直ぐに私に飛びかかれる位置でなぜか、止まった。

止まったのは私の投げた石が怖いのか、それとも……不気味な緊張感が周囲に漂った。

ふと後ろを振り返ると、私の背後にあの白いカラスがいた。

五ヶ月前に初めて出会ったときに、白さというよりも、灰色の羽、何かが違う感じがして私が近づいてよくみると、頭の一部が灰色で、少し離れて見ると白く見えるから、仲間外れにされ、いじめられていると思った。何とかして白いカラスを助けなくてはと、正義感からか、石を投げて、あの時はカラスを撃退することが出来た。

五ヶ月後の今、今度もと思い石を投げたがカラスに届かずに落ちた。

でも近くに落ちた石が火に油を注いだようにカラスの鳴き声が一時的に激しく、大きくなったが、それでもさすがに身の危険を感じたのか、関わっても意味がないと悟ったのか、カラスの群れはカー、カーと鳴き、飛び去った。

カラスが飛び去った後の公園はしーんと静まりかえった。蝉の声も耳に戻ってきて、夏の日が、暑さも戻ったように感じられた。じわりと、額に汗が流れ落ちるのを感じた。

雨が降り、夏の朝の日射しで濡れた地はすぐに茶色の色を取り戻し、木々の葉は緑に深く染まり、少し風が吹き、近くの「やすらぎの滝」から流れる水音が聞こえる。

白いカラスは何もなかったかのように、嘴を土にいれてミミズを探っている。日射しが戻りまた、雨上がりの柔らかい土地に嘴を入れている。

その次に白いカラスに出会ったのも、雨上がりの藤棚から続く、前田公の銅像後ろの目立たない細い木々の茂みで暗い道が続く場所だった。

緑の芝生の土地を掘り起こして、細い嘴を伸ばしていた。やがて細長いあずき色のミミズを土からヨイショと器用に引きずりだして、左右に必死に身体を何度もねじて曲げて抵抗する長いミミズをものともせずに――やがてミミズは動かなくなっていた――白いカラスは嘴に運んで、食べ尽くした。

横に置いた食べ残しの干からびたミミズを引きずり、石と土の間に嘴で空間を作り、隠した。カラスの貯食というらしい。

仲間から白いカラスを助けたことで、黒いカラスから自分の指名手配書が出て、警戒されるかも知れないと、病院に川村を見舞いに行き、白いカラスの事を話すと、

「どうせ白いカラスなど仲間外れにされて、遅かれ早かれ、嘴

で突かれて死ぬのに、なぜ、お前は無駄なことに、味方するのか」
すっかりと衰弱してベッドに横たわる川村が言った。
「君がいじめられる立場に立たされたら、もし、君が白いカラスのような立場に立ったら、僕は決していじめる者達を見逃さない」
私が弱々しい彼を見ながら言った。
「高校、地元の国立大学の成績もそこそこだし、公務員になれたし、優しい妻、子供にも恵まれたし、幸せな人生だった。社会の仲間外れにされないように、白いカラスにならないように、気を使い生きていた。やがて死んでゆくなかで、君が眩しく見えるよ」
と痩せた彼は力なく笑う。
「優秀な生徒は大学を卒業して地元の県や市の公務員、民間では地銀に入るしかないな。その組織に守られて生きていくしかない。白いカラスにならないように、周りに気を使い、まったくつまらない人生かも知れない」
私は言う。
「お前に言われたくない。相変わらず口が悪い。それが君が俺に対する愛情かもしれないが、お前のように田舎の貧しい家に生まれ泥水を飲んで生きた人間は、心情的には白いカラスを応援したくなることだろう。でも彼らは疎外されていく存在だ。君も公園で黒いカラスから指名手配されるように、今のままでは社会に疎外されて行く、もう丸くなっては。これが俺の遺言だ。丸くなれ。資格を持っているから、資格を大切にして、丸く生きろ。それが長生きする秘訣だ。公園のタブノキの魔法に掛かってみるのもいい……」
と咳き込みながらも、笑いながら彼は言う。
「もし、もう一度人生があるならば、君のように何も気にせずに自由に生きることだけを心がけるよ」
そう川村は言った。
その後も注意しながら、私は白いカラスの動きを見守った。黒いカラスたちに見つからずに、早く石の下に隠せたらいいのにと思うが、なかなかおおきな干からびたミミズを上手くは隠せない。何度も、石を動かせ、ようやくミミズを石の下に隠せた。
何日か後、公園を訪れると、白いカラスはまた嘴を土の中に入れて小さなミミズを土から引き出したが、周りを囲んでいた数羽の黒いカラスから羽を突かれて、黒いカラスたちにミミズを横取りされた。
白いカラスは餌が十分なのか、反撃はしない、ただ見守るだけだった。
「公園のカラスにどんなことがあっても石を投げるな。賢いから五年間、覚えているそうだ。指名手配で、君の指名手配の写真が公園中に貼り巡らされるかも知れない。公園のカラス全部を敵に回すことになる。もうこれ以上は白いカラスに関わるな。もう君は社会では白いカラスではない……」
彼の警告を噛みしめた。
でも彼の言葉に反して、私はミミズを食べている黒いカラスの群れにまた小さな石を投げた。
もうすでにミミズを横取りし、食べ尽くしたカラスたちは飛び立って行った。
突かれ、血の付いた傷ついた羽で、ピョン、ピョンとハネながら、周りを見渡しながら、私に近づいて来た。
賢いな、と思いながら、小さなミミズを相手に渡し、突かれ、傷つくことで、石の下のミミズを守ったのか。
当然に私にも感謝して、迎えてくれると思ったが、不意に横を向き、私の左手の方に曲がった。

そのまま廻る。変だと思って。カラスの嘴のその先に土の中から、またミミズの頭が見えた。また、ミミズを土から取り出していた。

こうして銅像裏の白いカラスはミミズのいる日陰の土地を、縄張りを守っている。必死に餌を隠して、自分の場所を守っている白いカラスに親近感を感じた。

石の下に餌を隠している白いカラスは、その後も公園にときどき来る私に愛想を振りまいていた。少しくらいは突かれてもそれぐらいたいしたことはないと思いながら、石の下に餌を隠しているのだろうか。

ずるい奴だと思いながらも、その愛くるしい姿を見る度にほっとけなかった。

私の父は三男坊で、兄の織物会社に勤めていた。村では疎外されているようだった。田圃も持っていなかったせいか。私は村というものは、田圃を持たない人達を疎外することで、村という組織を守っているように思えた。

父が兄の織物会社から独立して、当時、珍しかったレース工場を始めた。家は金銭的には豊かになったが、閉鎖的な村に対する私の息苦しさはそれでも変わらなかった。

小学校、中学校でも閉塞感を感じた。村の延長線上に封建的なものが続き、そこに成績という代物が加わっただけだった。

大きくなっても私は人間社会というシステムに息苦しさを感じた。

退院した後、公園を散歩するたびに、草は伸びて、日は昇り、雨が降り、風は吹く。その循環の一部に人間は参加するだけであるとあらためて感じた。

——白いカラスね、餌を隠して、自分が賢いと思い、腹の中では黒いカラスを軽蔑し、敵視している。お前のようだ——

病床での彼のつぶやきが聞こえるようだった。

私は幼い頃から、白く、堅く、万年雪のような孤独のこころが消えないで残っている。この空気のように、締め付ける社会、人間世界が造るシステム、その息苦しさを私は感じる。私も用心深く生きているが、いつ白いカラスのように、その羽の色で追い詰められるかもしれない。

目立たぬように生きていても、もし、白いカラスの立場に立たされたら、白いカラスがミミズを隠すように、お前は守銭奴とたとえ言われようと、この世の中に生きる中で多くのことを大切なものを隠していることだろう。

白いカラスを見るたびに、頑張れと声を掛けたくなる。たとえ傷付いても、自分の大切なものを命がけで守っているのかもしれない。

（二）「青い虫たちの風景」

春に薄い緑の草の中で、小さく弱々しいバッタやカマキリなどの昆虫たちが、夏になりどんな風に成長しているか、そっと覗いて見たかった。そう思いながら、前田公の銅像裏から、左手に桜池を見ながら、もうすっかり深い緑の草に包まれた三の丸跡に出る。

小松城の三の丸跡、明治時代には監獄署だった。日露戦争戦役戦勝記念として公園として設けられたと聞く。

『能美郡誌』によると「園に山を築き池をはなち、橋を架し花木松樹を移し、亭を構へ塔をたて、芝生を作りて遊覧に備ふ、遠近の風光亦た佳なり」を思い出していると、だんだんと情景が浮かんでくるのを感じながら、歩を進める。

また、『新修　小松市史10・図説　こまつの歴史』によれば「城の取り壊しに関わったのは、三の丸に設置された小松懲役場で

あった。……服役者が土地改良や開墾の労役に携わった。樹木は伐採、石垣は崩され、堀を埋めて農地化が進んだ」囚人を使い城を壊す、農地に変える、まさに一石二鳥である。このあたりは一面、田圃になっていたかも知れない。小松町民の声で公園となったようだ。

「明治三十八年から始まった公園の新設事業は土地の整備作業、……うずまき山を築き、あやめ池を掘り、錦橋、雁行橋を設けて公園の形が整った」（河南地方史研究・第四十八号）

公園の歴史に思いを巡らせながら、春、生まれたばかりの小さく弱々しいカマキリ、バッタの姿も、夏になれば逞しい一人前の昆虫に成長しているだろうか。

そんな懸念も深い緑の草むらの中に、一人前に成長した昆虫、カマキリ、バッタの姿が見えて、ひと安心する。

桜池に戻り、ふと気がつくと白いワイシャツ、ネクタイ姿のいかにも新卒らしい若い会社員らしき男が黙ってベンチに座って、池をじっと見つめている。

もう午前八時近くになるが、このまま公園から頑張って会社に行っても、たぶん遅刻しそうな時間なのに、ただ池を見つめている。

背後から眺めていると、弱々しく、自信のない、落ち着きのない目で、小さく弱々しい春先の草むらの中のか細い昆虫のように、静かに池を見つめているのだった。身体は細く、眼鏡姿、いかにも神経質そう。心配した母が玄関前で毎日、見送ったのだろうか。家を出てきたが、それでも会社には行けなかったのだろうか。

男は突然、立ち上がり、水飲み場に向かい、顔を洗った。手からこぼれ落ちた水がキラキラと光っている。顔を洗っても、洗っても、洗っても、気が済まないのだろうか。ただ手から水がこぼれ落ちて行く。

男はまたベンチに座り、池を見つめていた。

私は声をかけようと思ったが、そのとき何かが近づいて来る。あの白いカラスである。

カラスが嘴で男の足を突く、初めはめんどくさい様子だった。相手にしない様子だった。手をふりほどく姿から、やめてくれというような様子にも見えた。それでもカラスは嘴で突くことを繰り返している。

感覚的に同類だと思い、近づいたのだろうか。関わられることで、干渉され、さらにカラスの嘴の攻撃を受け続けて、とうとう堪らずに席を立ち、逃げ惑う。彼の顔にはいつしか笑みがこぼれていた。

げっそりと痩せた顔に、キョロ、キョロと見渡す落ち着かない目、そんな彼の顔に赤みがさして、だんだんと笑みがこぼれ始めた。

今度は男が白いカラスの後を追いかけ始めた。

鬼ごっこが、池の周りで繰り返し続く。

男の顔に少しづつ笑顔と赤い血がよみがえってきたようだった。

さすが白いカラスは欲深く、仲間外れにされても、食べ物を隠して貪欲に生きて行く、狡いカラスだった。

相変わらずピョン、ピョンと跳ねている。

驚くことに大胆にも肩や頭の上に乗っている。

私は若者に声を掛けようと思っていたのにかけられなかった。そのままその場を離れ、私は男と白いカラスをただ見つめていた。

もう、きっと彼は大丈夫だろうと確信した。

数日間、朝の公園に姿を見せていた若者が、その日を境に姿を見せなくなった。

（三）「寝泊まりする男の風景」

「小松市立図書館の公園側入口右側に置かれている丸い大きな加工石は明らかに巨大な五輪塔の一部である」（加南地方史研究・五十号号）

前から図書館前に置かれていた石を不思議に思っていた。その丸い加工石の正体を研究誌で知り、ようやく疑問の一つが解決できる気がした。そんな気持ちで三の丸跡から市立図書館の前を通る。

橋を渡り、あやめ池のちかくで、右手に公園で宿泊する人に出会った。背は低く、頭を手ぬぐいで包み、赤胴色の顔をしていた。

まるで蓑虫のように泊まれる東屋を確保している。蓑虫と言ったのは寝袋が見えたからである。建物とつながっているトイレ、水飲み場があり、蛇口をひねれば水も出る。東屋で雨露をしのぎ、いつしか公園に住み着き始めたようだった。

朝、毎日、毎日、駅のほうに向かう男と、公園に散歩に向かう私といつもすれ違う。近くのショッピング・センターの一階の広場で寝転びながらテレビを見て終日過ごしているようだ。夕方にはまた公園に戻って来て、眠るようだ。

東屋の座席の後ろの場所は吹き抜けで、洗濯物が干してある。その場で宿泊しているようだ。でも自分の過去を悔いているのか、「チクショー」と叫ぶ声が聞こえる。また、気に入らないことがあると、東屋の壁をドンドンと叩いている。

散歩などで公園を利用している近くに住む人たちとの会話や支援などでの交流は成立しているようだ。

「犯罪者ではないようだ。偶然にこの街にやって来たようだ。白山がきれいに見えたからしい」

「従業員に金を持ち逃げされ、事業に失敗して、妻が家出して、会社は倒産した」

私が何処ででも聞くような話、へきえきするような作り話のような話を公園を散歩している人と話しているらしい。それが私の耳に聞こえてくる。公園の利用者たちからは見守られ、理解され、温かく守られているようだ。

朝、公園の東屋そばを散歩する私の目に、チョンマゲ姿が見え、白い洗濯物を干してあるのが見える。

あの干した白いシャツを着て駅の方に行く。手から信玄袋を下げている。そこに全財産を入れているようだ。

男と何回かすれ違ったが、悪臭もしない。

このまま男の平穏な日々が続くようには思えなかった。

ある日、娘としか思われない女が父親らしき男にすがるように歩きながら、説得しているように見えた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

と繰り返した娘の言葉が、風に流されて、私に聞こえて来る。

市役所が男に聞き取りして、娘に知らせたからだろうか。

「どうして、何が恥ずかしいの……」

「私のどこが悪いの……」

「どうして欲しいの……」

娘の声が散歩する私に断片的に聞こえる。

娘が男を説得する姿が何日か続いた。

娘はかたくなに帰ることを拒む父の後をすがりつくように、一緒に歩いたが、数日後、娘の姿が見えなくなった。

時々、男が白いカラスにパンくずのようなものをやっていた。

感謝か、白いカラスが、手の上や頭の上に乗った。

男の表情はだんだんと和らいでいった。

いつのまにか季節は秋が深まり東屋の屋根近くまで伸びたもみじが紅葉し、やがて冬になりサザンカの花が咲き、やがて白い雪が降った。

公園のサザンカの赤と雪の白とのコントラストが美しい、とても寒い冬の朝だった。
おおぜいの市役所職員の人達と警察官とが男の寝床を囲んだ。外から中が見えないようにブルーシートで被われて東屋の中で何が執行されているのかが分からない、外からは男の様子も見えない。
強制執行か、「都市公園条例第五条により、公園内での寝泊まりを禁ずる」
その日から、男の姿が見えなくなった。
東屋の壁に、チクショーと書き残して。

（四）「猫を抱いた老婆の風景」
かつては猿やクジャクが置かれていた動物舎は、今では茶室になっている。
朝、公園を散歩する私に、茶室のしげみから、ニャーと弱々しい泣き声が聞こえる。やがて目が栄養不足か、キラキラと異常に輝く黒い猫が現れた。
――猫に餌を与えないでください。このまま、――書かれた立て看板が見える。
公園では不妊手術をして、猫が増えないようにしているようだ。ゆくゆくはこの公園の猫をなくして行くつもりなのだろうか。それが行政の方針なのだろうか。
猫は身体が雨に濡れたせいか、異様に痩せて見える。目が異様に輝いている。捨て猫だろう。
ニャーン、ニャーンと泣く。
公園に雪が降り続き、あたり一面が雪でおおわれていた。
雪のせいか、音も消えた静かな公園である。
降りしきる雪の中から、不意に真白な髪の老婆が木のしげみから猫を抱いて現れて来た。
身体は年のせいか幾分縮んだように丸く小さく、腰も曲がっているせいか、さらに小さく見えた。
以前は老婆とともに公園の猫に餌をまいている人もいたが、もうだれもいなくなり、公園を管理している市は、猫に避妊手術をしたり、餌をやることを禁止すると、公園からは猫が減ってゆき、今では猫の姿も公園では見えなくなってしまった。
雪の中、茶室の木々の間から出てきた老婆は黒い猫を抱いていた。
数日して、公園の近くの家の玄関に、黒い喪中の紙が貼られていた。
新聞で、お悔やみ欄から、九十五才のあの老婆の死を知った。

（五）「夜の公園の風景」
公園は深い闇に包まれ、静寂に包まれて、すべてが眠りについているようだった。
しげみの中に密かに身を隠して、眠りについたものたちが覚ますことがないように、私はそっと公園に入った。
東の空から上った大きな月の光りは、眠りについたものを夢に誘うように、白く大きく輝いている。
月の光が公園に落ちている「白いカラス」の羽を照らした。落ちていた白い羽に導かれるように、公園に深く入り込んだ。
深い霧に包まれた池の水面に、城の石垣を崩し、その石を運んでいる囚人たちの姿が浮かぶ。月の光を浴びた白い囚人たちと、目を合わさないようにし、音を立てないように静かに橋を渡り、ベンチに座り、月の光でキラキラと輝く池を見る。池の周りでは、目を輝かし、フクロウが枝の上にじっと座っている。鯉が月に向かって跳びはねている。クジャクが闇の中で長い羽を広げている。

音を立てずに何者かが木に上っていく、やがて枝の先を揺らし、遊んでいる。公園の北側、小松高校の近く、北側には動物舎があり、クジャクや猿が飼われていた。公園から、別の場所に移されたが、月の下でしかも霧に包まれた夜になると、クジャクや猿が元の場所に戻ってくるのだろうか。

また、池の水面には、白いカラスが仲間に突かれて、血だらけになりながら、自分の居場所を守った。

夏を経て、若者は社会でカマキリやバッタのように逞しくなっただろうか。野宿していた男はどこかに引き取られていったのだろうか。チョンマゲ姿の男が池の水面に映る。猫を抱いていた老婆は死に、猫はどこかに消えた。

月に照らされた築山を上り、深い公園の闇を眺め、月の光で輝く東屋を見つめる。

彼は市役所職員となっても、出世にこだわらずに生きていた。そんな川村の口から「公園の入り口のタブノキの魔法に気を付けろ、この世もまた公園のように魔法に掛けられている」と高校時代と同じ言葉を聞くとは思わなかった。

彼は読書が好きで、博学で特にニーチェが好きだった。国立大卒で仕事も懸命にこなしていたのに、地位に恵まれなかった。七十才過ぎて直ぐに不治の病気になってしまった。

魔法が切れても、次の魔法にかかることになるかも知れない。魔法の先にあるものは、神かもしれないと、彼は気が付いたかも知れない。

この地は人々が行き来し、寺、城、監獄、公園と風景は変わり、風景が流れていったのだろうか。

気がつくと、公園はもう朝の光に包まれていた。タブノキは、今日もこの公園に来る人々に魔法を掛けるのだろうか。神の存在と魔法はどこか似ていると私は思う。

「神と魔法は同じようなものにみえる。哲学者ニーチェは神は死んだと言ったが、神を否定すればするほど、自分が神を意識して、神に近づくことを望んでいるという、矛盾している自身を知り、ニーチェの悲劇が始まったのだろうか。僕も同じく矛盾し、悲劇に、不治の病に落ちた。君の神は、魔法は……」

三ヶ月前にベッドに横たわりながらこれが最後ときっと思い、私に言った川村の言葉を思い出しながら、早朝の芦城公園のタブノキを振り返ると、起きていたのか、眠っていたのかが分からない細い目で微笑しながら、包むように私をじっと見つめていた。